

状列石周辺のほとんどのグリッドから出土しているが、数量的にみてみると、環状列石の南側、東側、第2号遺物集中ブロックから多く出土しており、特に第2号遺物集中ブロックからの出土が目立つ。

ピエス・エスキューは12点で、そのほとんどが第2号遺物集中ブロックから出土している。

石核は101点で、環状列石の南側、東側、第2号遺物集中ブロックに分布しており、特に東側と第2号遺物集中ブロックからの出土が目立つ。

敲磨器類は132点で、環状列石の南側、東側、第2号遺物集中ブロックに分布しており、特に東側と第2号遺物集中ブロックからの出土が目立ち、石核と同様の分布状況を呈している。

磨製石斧は19点で、環状列石周辺の広範囲にわたって疎らに出土しており、第2号遺物集中ブロックから特に多く出土しているスクレイパー類や敲磨器類などの分布状況とは異なる様相を呈している。

その他の石器については出土点数にもよるが、上記の範囲に分布している傾向がみられる。

以上のことから、場の使い方を想定すると、環状列石南側及び東側から出土している石鏃、石核、敲磨器類などについては、使用後または製作の際の残核などが残置されたものと考えられる。

第2号遺物集中ブロックから出土しているピエス・エスキュー、石核、敲磨器類などについては、使用後または製作の際の残核などを廃棄したものと考えられる。

こうした分布状況の中で、環状列石内からは遺物がほとんど出土しておらず、環状列石の広場は聖なる空間として使われていたと思われる。

大石平型石籠について

「大石平型石籠」は、大石平遺跡において仮称された名称で(青森県教育委員会1987a)、つまみ状の頭部、あるいは柄と考えられる部分を有する小型の石器で、石籠とは形状・大きさ・重量等きわだった特徴を有している石器である。

これらの特徴を有する石器は、本遺跡からは8点出土しており、うち3点は遺構内からの出土のもので、竪穴式住居跡、土坑、第2号遺物集中ブロックからそれぞれ1点ずつ出土している。

竪穴式住居跡は縄文時代後期初頭に構築されたものであるが、本遺物は、縄文時代後期初頭～前葉に堆積した覆土中から出土した。

土坑(第95号土坑)は環状列石周辺の南側に位置し、縄文時代後期前葉の土坑群の一つで、本遺物はこの覆土から出土した。

第2号遺物集中ブロックは、前掲の竪穴式住居埋没後に形成された縄文時代後期前葉の捨て場であり、この中から出土した。

これらは、いずれも縄文時代後期初頭～前葉の範疇に属する遺構から出土しており、本遺跡では当該時期に、製作されたものと考えられる。

本遺跡以外で、青森県内で発掘調査によってこの種の石器が出土している遺跡は、太平洋側では大石平遺跡、上尾駒(2)遺跡、小田内沼(1)遺跡、中野平遺跡、馬淵川流域では丹後谷地遺跡、田面木平(1)遺跡、岩木川水系では観音林遺跡、木戸口遺跡、堀合(1)遺跡、青森湾周辺では近野遺跡、四ツ石遺跡に分布が認められ、11箇所を把握している。

報告書によって名称および分類に相違がみられ、時期、出土点数とともに第54表に記載した。

第54表 県内の大石平型石籠出土状況

遺 跡 名	名称および分類	時 期	出土点数
大 石 平 遺 跡 (青森県教育委員会 1985b)	E (石籠) - 類	後期	6点
" (青森県教育委員会 1986b)	E (石籠) - 類	後期	22点
" (青森県教育委員会 1987a)	大石平型石籠 (仮称)	後期	45点
上 尾 駒 (2) 遺 跡 (青森県教育委員会 1988b)	大石平型石籠	後期	61点
中 野 平 遺 跡 (青森県教育委員会 1991a)	大石平型石籠	早期	4点
丹 後 谷 地 遺 跡 (八戸市教育委員会 1986)	V類エンドスクレイパー	後期	6点
田 面 木 平 (1) 遺 跡 (八戸市教育委員会 1988)	エンドスクレイパー	後期	1点
小 田 内 沼 (1) 遺 跡 (三沢市教育委員会 1992)	大石平型石籠	後期	1点
觀 音 林 遺 跡 (五所川原市教育委員会 1990)		後期	2点
木 戸 口 遺 跡 (平賀町教育委員会 1983)	搔器	後期	4点
堀 合 (1) 遺 跡 (平賀町教育委員会 1981)	爪形石器	後期	1点
近 野 遺 跡 (青森県教育委員会 1974)	石籠 I a類	後期	8点
" (青森県教育委員会 1977b)	碇型石器	後期	8点
四 ツ 石 遺 跡 (青森市教育委員会 1965)			
小 牧 野 遺 跡 (本報告)	大石平型石籠	後期	8点

この12遺跡において、「大石平型石籠」が本遺跡と同様に縄文時代後期初頭～前葉に製作されたと思われる遺跡は、中野平遺跡を除く11の遺跡である。中野平遺跡のそれは縄文時代早期に属するものと考えられ、縄文時代後期のものに比べ、剥離調整が雑であるように思える。

「大石平型石籠」は、形式的にみるとはじめの方で述べた概念によるものであるが、編年的にみると、遺跡の分布状況から、縄文時代後期前半に各地で製作されたものとして捉えることができる。

続縄文時代の石器について

本遺跡の続縄文時代の遺物は、第 層および第 層に包含されており、主に環状列石内ならびにその南側から出土している。

本遺跡から出土している石器の中で、続縄文時代と縄文時代後期の石器の形態を比較できるものとして石籠が挙げられる。続縄文時代では二等辺三角形で薄手の凹基・平基無茎籠が多く出土しており、縄文時代後期のものでは二等辺三角形で基部形態が凹基・平基・凸基・尖基と多種あり、有茎籠が大半を占め、基部形態に違いが認められた。

北海道の続縄文時代の遺跡では、道南地方と道東地方で基部形態に違いがみられ、道南地方では有茎籠が、道東では無茎籠が多く出土しているようである(千代1983)。本遺跡から出土した石籠は道東地方から出土している石籠に近い形態を呈している。